

娯楽制作物におけるポストモダン要素の検討

—日本におけるポストモダン小説の受容の物語構造分析を通して—

金子沙織 高田明典

フェリス学院大学文学部

1. はじめに

表現制作分野での「ポストモダン要素」の重要性は、近年ますます増加している。建築の分野においては、“Ground Zero”（9・11 跡地）に建設中のモニュメントに、ポストモダン建築に分類される建築家であるダニエル・リベスキンドの設計である“Freedom Tower”が採用されたことがあげられる。また、安藤忠雄の「表参道ヒルズ」や丹下設計の「コクーンタワー」なども、ポストモダン建築に分類される。現代美術の分野においても、セルフ・ポートレイト（森村泰昌）、アトムスーツプロジェクト（ヤノベケンジ）、エアボードプロジェクト（八谷和彦）などのポストモダン系の作品が耳目を集めている。さらに近年において、この傾向は文芸作品のジャンルにまで及びつつあり、「ポストモダン文学」に分類される作品が多く出版され、人気を博している。

筆者らはこれまで、物語構造分析の手法を用いて、主として映像作品などの訴求構造の分析を行ってきた。物語構造分析とは、そもそも「物語構造」の存在を前提としているものであり、ポストモダン系の作品に対して、物語構造分析の手法を援用することは難しいと考えられてきた。しかしながら一方で、通常の表現制作物にさえ「ポストモダン要素」が含まれるようになり、むしろその要素が訴求力の中心を形成していると考えられる事例も多く見られるようになってきた。特に、エーコによる「開かれ」の概念は、文芸作品のみならず、多くの表現制作物の訴求力を分析する上で、中心的な概念となりつつある。

本研究においては、上記のような事情に鑑みつつ、エーコの「開かれ」の概念を中心として、ポストモダン系表現制作物における訴求構造を分析するための手法の枠組みを提供することを主たる目的とする。

また、日本におけるポストモダン小説の受容の形態が、米国における受容とはかなり異なっていることに着目し、その二つ

の受容の形態の違いについても併せて検討した。

2. 方法

本研究においては、ポストモダン要素を「開かれ」との関係で定義する。ここで「開かれ」とは、鑑賞者が「参加」できる余地の大きさを指す。「参加」を許容する余地が大きいということは「開かれ」の度合いが大きいということを意味し、また、「参加」を許容する余地が小さければ、「開かれ」の度合いも小さい。「参加」とは、読者・鑑賞者が、作品に触発されつつも、自らの思考や想像によって作品を完成させることを指す。

文芸作品における「参加」の程度は、主として以下の三つの要素によって決められる。

①「深層の空洞性」：深層構造の不在、もしくは深層が空洞であることにより、読者はその部分を「想像」や「思考」で埋めようとする。

②「誘導」：表層構造に欠落が存在することにより、読者はその部分を埋めようとする。

③「表層の構造的性」：表層構造の欠落が読者によって認識されるためには、表層が構造的である必要がある。

つまり、「構造の何らかの欠落もしくは不在」によって、読者や鑑賞者の「参加」が誘導されると考える。そして「参加」の度合いの高さは、ポストモダン要素の形成において重要な役割を担っている。

さらにここで、「構造」とは物語構造分析における主要概念であり、物語における「関係の束」を指す。「関係」としては、対称性（＝対立関係）・相同性（＝相似関係／同値関係）・再現性（＝相同な継起関係）の三つを想定する。「構造的」とは、これらの関係が密に存在することを指す。構造を同定するための分析手法としては、グレマスの「行為項分析」、レヴィ＝ストロースによる「シーケンス分析」、スーリオの「関係分析」、イコノロジー分野の「絵画分析」などが存在するが、表層の構造的性の特定に関しては「シーケンス分析」が有用であると考えた。シーケンス分析とは、物語の主題を「相同な継起性」をもとに推定する分析手法であり、この分析手法を用いることによって、表層が「構造的であるか否か」を判定しうる。表1として、レヴィストロースによる分析で知られる『アスディワル武勲詩』のシーケンス分析例（冒頭のみを表示）を示す。そこに

Considerations on Postmodern Factors of Entertainment Products: Through Structuralism Analysis of Receptiveness of Postmodern Novels in Japan.

KANEKO Saori, TAKADA Akinori

Faculty of Letters, Ferris University

見られるように、主題要素が繰り返し発生するシーケンスを有していること自体が、その物語の表層構造が「構造的」であることを意味している。

3. 分析

本研究においては、ジェイムズ・ボイルン『フランケンシュタインの花嫁』の分析を中心として、ポストモダン要素の同定と検討を試みた。併せて以下の小説に関しても分析した。

- ジェイン・ローダー『ワイルドアメリカ』
- エリック・マコーマック『帯の道』
- ピーター・ケアリー『デブ連歴史に登場』
- トマス・ピンチョン『低地』
- ガルシア・マルケス『年をとった男』

さらに、日本におけるポストモダン小説の受容との比較のため、小林恭治『小説伝』について同様の分析と検討を行った。表2として、分析例の一部を示す。

4. 結果および考察

表層構造に関しては、以下の2種類の特徴が見出された。

- A. (表層が) 非構造的 (A₀) — 構造的 (A₁)
- B. (表層構造に) 欠落あり (B₀) — 欠落なし (B₁)

さらに深層構造に関して、以下の特徴を見出しうると考えた。

- C. (深層が) 空洞 (C₀) — 構造的 (C₁)

ただし、深層構造の不在もしくは深層の空洞性に関しては、さらなる議論が必要である。

表2 『フランケンシュタインの花嫁』のシーケンス分析例 (一部)

シーケンス	フランケンシュタインの花嫁	登場人物 (主要人物)	時間	場	内容	叙述の技法
序章	レイチェルはインクを飲み、血管が染まる。(怪物になる)					
第一章	ケイトはリポーターであり、つららの重傷によって死んだ遺失の取材をしていた。					
第二章	ケイトは、裏で別居し、養育を重に置いたまま、ポーチへと向かう。			ケイトは、フォーニヤ(犬)を見る。		
第三章					ノックしたが返事が無い。	
第四章	扉を叩いているハンターの輪を見る。					
第五章	レイチェルの母が壁をカミソリで削っている。					
第六章	レイチェルの母が壁をカミソリで削っている。					
第七章	レイチェルは「フランケンシュタインが、怪物を造って水屋に踏み入っていくところ」を映し、インクを飲む。(北極の地)					
第八章	インクの件を、レイチェルは「わたしにだってできるってことを、顔に見せてやりたかったの」と答える。					
第九章						
第十章						
第十一章						
第十二章						
第十三章						
第十四章						
第十五章						
第十六章						
第十七章						
第十八章						
第十九章						
第二十章						
第二十一章						
第二十二章						
第二十三章						
第二十四章						
第二十五章						
第二十六章						
第二十七章						
第二十八章						
第二十九章						
第三十章						
第三十一章						
第三十二章						
第三十三章						
第三十四章						
第三十五章						
第三十六章						
第三十七章						
第三十八章						
第三十九章						
第四十章						
第四十一章						
第四十二章						
第四十三章						
第四十四章						
第四十五章						
第四十六章						
第四十七章						
第四十八章						
第四十九章						
第五十章						
第五十一章						
第五十二章						
第五十三章						
第五十四章						
第五十五章						
第五十六章						
第五十七章						
第五十八章						
第五十九章						
第六十章						
第六十一章						
第六十二章						
第六十三章						
第六十四章						
第六十五章						
第六十六章						
第六十七章						
第六十八章						
第六十九章						
第七十章						
第七十一章						
第七十二章						
第七十三章						
第七十四章						
第七十五章						
第七十六章						
第七十七章						
第七十八章						
第七十九章						
第八十章						
第八十一章						
第八十二章						
第八十三章						
第八十四章						
第八十五章						
第八十六章						
第八十七章						
第八十八章						
第八十九章						
第九十章						
第九十一章						
第九十二章						
第九十三章						
第九十四章						
第九十五章						
第九十六章						
第九十七章						
第九十八章						
第九十九章						
第一百章						

表1 『アスディワル武蔵詩』のシーケンス分析の例

シーケンス	登場人物	行動	出会い	結婚	食料の充足	父子	行方	死・結末
(1-1)	(1-1)母と娘が、真昼で夫を失う	(1-1)母と娘が別々に東と西へ移動	(1-2)母と娘が出会う (1-3)空腹を感じながら野宿をする		(1-4)買った野菜を見つけて食べる			
			(1-5)ハツエナスが娘を訪れる		(1-6)ハツエナスのおかげ食料に困らなくなる			
				(1-7)娘はハツエナスと結婚する		(1-8)アスディワルが生まれる		
			(1-9)父(ハツエナス)が息子に祝儀を与える		(1-10)祝儀による食料の充足			(1-11)ハツエナスの不在と母(祖母)の死

これらの組み合わせによって、以下の分類を行い、検討した。

- 古典・ジュブナイル : A₁-B₁-C₁
- モダン小説 : A₀-B₁-C₁
- ポストモダン小説 (米国) : A₁-B₀-C₀
- ポストモダン小説 (日本) : A₀-B₁-C₀

日米においてポストモダン小説の受容の形態が異なっている原因に関しては、文学史上の発展過程が少なからず影響していると考えられ、その事情に関しても併せて検討した。

【参考文献】

- 1) ウンベルト・エーコ(著) 開かれた作品 篠原資明(訳) 和田忠彦(訳) 青土社, 1984
- 2) 『positive 01-ポストモダン小説, ピンチョン以後の作家たち』, 書肆風の薔薇, 1991
- 3) トマス・ピンチョン(著) 志村正雄(訳) スローラーナー 筑摩書房, 1994
- 4) ガルシア・マルケス(著) 鼓直(訳) 木村栄一(訳) エレンディラ 筑摩書房, 1988
- 5) ジョナサン・カラー(著) 荒木映子(訳) 富山 太佳夫(訳) 文学理論 岩波書店, 2003
- 6) 新田義弘(他編) テキストと解釈 岩波書店, 1994
- 7) クロード・ブレモン(著) 坂上脩(訳) 物語のメッセージ 審美社, 1975
- 8) 高田明典 ポストモダン再入門 夏目書房, 2006
- 9) 高田明典 構造主義方法論入門 夏目書房, 1997